

小論文

慶應義塾大学 文学部 1/2

＜総括＞

試験時間 90 分

総解答字数 760 字

課題文の長さや設問の形式は、基本的には、例年の傾向と変わらない。設問Ⅰでは課題文の全体を対象とした要約を行う。設問Ⅱでは指定のテーマに即して自分の考えを論述する。内容は「自然と技術」論である。課題文を読解してまとめる力、また、与えられたテーマに関して、自分なりに考える力や表現力などが試されている。

＜課題文の分析＞

大問番号	
内 容 (主題)	自然と技術の関係
出 典 (作者)	吉岡洋『AI を美学する——なぜ人工知能は「不気味」なのか』平凡社新書、2025 年
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・ 変化なし ・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・変化なし・ やや難化 ・難化)

＜大問分析＞

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	I	要約	300 ~ 360 字	この文章を要約する。
			II	論述	320 ~ 400 字	自然と技術の関係について、この文章をふまえて、自分の考えを述べる。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

小論文

慶應義塾大学 文学部 2/2

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

課題文は『A I を美学する』と題された書物からの抜粋である。このタイトルがある程度、課題文の内容を指し示しているようである。まず筆者は「人工知能」という言葉をめぐり、「知能」と「人工」とに分ける。その上で、まずは「知能」に関して簡単に触れた後で、「人工」についての議論に移る。この「人工」の問題が課題文の中心となる。これを進めるにあたって、筆者が参照するのがイマヌエル・カントの『判断力批判』という書物である。課題文はほぼこの書物の紹介にあてられている。そして、カントに即して「自然」を説明した上で、自然と技術との関係についての思考が展開される。ここで書かれていることは、決して分かりやすいものとは言えない。ゆっくりじっくりと向き合えば理解は可能だろうが、それを受験会場で行なうことは相当に困難なことである。たとえ分からなことがあっても、その分からなさを抱えながら、とにかく読み解いていくしかない。

設問Ⅰは、課題文の全体を対象とした要約問題である。課題文の全体の構成を押さえた上で、うまく論点を抽出し、整理してまとめたい。ただし、制限字数がある点には注意が必要である。「300字以上360字以内」という条件に収まるように、字数のコントロールをしっかりと行わなければならない。なお、課題文の全体要約であるため、「知能」と「人工」の両方に言及すべきであろう。特に後者では「自然」に対するカントの考え方方が紹介されたうえで、「自然と人工（技術）は単純に対立しているわけではない」とか、「技術は……二面性において考えられなければならない」と論じられていたのだった。

設問Ⅱは、「自然と技術の関係」について、この文章をふまえて、自分の考えを述べる論述問題である。なお、設問文にはないが、自分なりに具体的な事例や場面を想定するとよい。また、指定されたテーマに対してさまざまなアプローチの仕方があるだろうが、課題文の論点（設問Ⅰで確認したもの）をふまえ、応用するようにしたい。さらに、本設問でも「320字以上400字以内」という制限字数に注意する。

解答にあたっては本文をふまえる必要があるが、カントに依拠して書かれた本文全体を確実に理解することは至難である。分かる箇所にくらいくらいしていくほかない。本文では文明や人工物も自然の支配下にあり、太宰治は鉄道の陸橋や地下鉄のような技術の産物を「芸術」だと思っていた、などと書かれていた。たとえば、そのあたりを手掛かりにして論述を構想してみるのもよいだろう。その上で、自分なりに具体例や場面を想定する。たとえば、A Iを利用した自分の直接体験から発想してみてもよい。また、画像生成A Iは「自然にみえる」作品を生み出しが、技術の成果が自然にみえればみえるほど、なんだか不気味に思えるといった点に着想をもとめることもできる。それ以外にもA Iを活用した技術の様々な応用例に即して問題点や面白さ、その可能性などをめぐって考えることもできよう。なお、「技術は自然を破壊する」といった論点も不可能ではないだろうが、本文の内容とどう接合するのかということはよく考えておきたい。

学習の対策としては、教養の幅を広げつつ、現代的な諸問題をめぐって考える力を鍛えていくことが大切である。もちろん今年度に出題された内容が次の年度にも同じように出題されるとは考えづらい。よって、ここ数年の過去間に向き合い、何が試されているのかを丁寧に確認していく作業が不可欠である。また、自分で考えたことを言葉として表現する力も必要であるのだから、日常的に書く訓練もしていきたい。